

令和2年度学校だより

横浜市立緑園西小学校発行



緑園西

泉区緑園3丁目39番地

Tel (811) 6030

<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/ryokuennishi/>

マニュアルには載っていないこと

学校長 立田 順一

新型コロナウイルス感染症の影響により、「例年どおり」や「前例にならって」ということが通用しない状況が続いています。言い換えれば、「これまでどおりのマニュアルが通用しない」場面が多くなっていると言えるでしょう。

……今年にはコロナ禍のために延期となってしまいましたが、毎年この時期に行われていた東京マラソンは、約3万人のランナーが首都の中心部を駆け抜けるという国内最大級のスポーツ・イベントです。今から14年前の平成19年（2007年）に開催されたその第1回大会に、私はボランティアとして参加をしていました。

海外には以前からこうした大規模な市民マラソンの大会があります。東京マラソンの準備に携わる関係者は、「世界のどこにも負けないマラソン大会を東京で開き、成功させたい。そして、それを東京オリンピックの招致につなげよう」という強い思いをもって準備を進め、交通規制、ランナーやボランティアの募集、スポンサーの確保などの様々な問題を乗り越えて、ついに大会の開催にこぎつけたのです。

大会当日の2月18日（日）は朝から雨が降っており、気温も5度まで下がっていましたが、スタート地点である都庁前には、約9万5千人の応募者の中から抽選で選ばれた30,870人の参加者が集まりました。また、私を含めた約1万人のボランティアも、それぞれの持ち場で待機をしていました。

午前9時10分。号砲が鳴り響き、大量の紙吹雪が舞う中をランナーたちはスタートしました。私は日本橋にある23km地点の「給食ポイント」のサブ・リーダーでした。市民マラソンでは、水分だけではなく栄養も補給しながら走るのが常識です。事前に国内外の市民マラソンを視察したスタッフの試算により、3万人のランナーに対して十分な量の食べ物として、コース全体でバナナ4万2千本、あんパン1万2千個、東京名物の人形焼き6千個などが用意されており、最初のうちは順調でした。ところが、厳しい寒さはランナーの体力を急速に奪い、通常よりもたくさんの栄養補給が必要となっていました。予想外のペースで食べ物はなくなり、まだ全体の半分も通過していない段階で、23km地点に用意した食べ物は底をついてしまったのです。栄養補給が本当に必要な人たちが通るころには、もう何も残っていないのです。大会運営用に分厚いマニュアルが用意されていましたが、こうした事態への対応については、もちろん、どこにも書かれてはいませんでした。そんなとき、困惑する私たちボランティアに向かって、23km地点のリーダーがこう言ったのです。

「食べ物はなくなりました。あとは私たちのアイデアでランナーたちを励ましてみましょう。そして、この大会を成功させましょう」

私たちは思い思いの方法で応援をすることにしました。手拍子をしたり、ランナーとハイタッチをしたり、コンビニで食べ物を買って求めてランナーに渡したり……。後でわかったことですが、他のポイントでも同じようなことが行われていたということです。

さらに、沿道では信じられないことが起きていました。応援をしていた人たちが、自分のバッグに入っているチョコレートや、ポケットの中の飴などをランナーたちに手渡していたのです。沿道を埋めた約200万人の人々の思いも、私たちボランティアと同じだったのです。

制限時間が経過した午後4時10分。最後の完走者となる25,102人目のランナーが東京ビッグサイトにゴールし、大会は終了しました。

この第1回大会の成功によって東京マラソンの人気は一段と高まり、翌年の第2回大会には15万人を超える応募者がありました。そして、東京の新たな冬の風物詩として定着し、現在に至っています。



細かなマニュアルを作成しておくことは大切です。けれども、マニュアル以上に大切なことがあるのだ、ということに気づかされた経験でした。